形影夜話

乾

洋学文庫
文庫8
C 222
1

形影夜話序

形影夜話者家翁鷧齋先生所録也先生之門病客成羣拮据刀圭無復餘暇此昔年君夫人分娩之日寓直十數日塊然獨處隨得録之悉皆係先生胷中蘊蓄目前經驗門人讀之可知吾家醫術之源委也余前後所購西書數十種近者

官府有

命就中俾上一種地理書收爲

41- 7633

官物。賞賜白銀二十枚。勤深感戴。不敢浪用。因念形影夜話尚在傳鈔。遂資以刻于家。使門人子弟永獲免筆硯之勞。亦分拜官賜之意也。謹述縁由。以冕簡首。

文化己巳冬十月不肖男杉田勤謹識

鷧齋杉田先生肖像

大浪寫

先生今茲七十八齢矣。請大浪石川君。爲寫其眞。後來子孫末流弟子。拜此像。讀此書。庶幾有親炙意思。

庚午七月

男　勤　謹識

形影夜話序

今はむかしのことゝなりぬ寛保元年二月二日の日我君のおもふ所ある君に宮仕へせし女房あまた　姫君まうけ給ふ同じ月の十六日に北の御方　若君うませ給ふにいまだ御二つにもおはしまさせ給はざりしにおのやうなる　若子御二所ともにいと生れ出させ給ひしかど御館にて内の御賜ひ同じくさんかくなしかくあるべしによりて薬師とも皆召されて初のかたさいはひしたるかひもなく露たのみの御悩ともおりしはさらにそのよりてみな御服給はぬさまとはいまだ御日数も過させ給はぬ御事なりき其一人つねに命直し侍ることをおぼしきことのおほせごと

河原しみよの里　御鏡の内にして直に語りてこつ
かゝるものにこもりゐるうちしもおきき衣の法さく
何のせんすべもなくたゞ紙のけぬきとり出しおとがひ
はひげぬき侍りけるに久しく男ひたしてありし
ものなきはさひかくみて思ふまゝにくひ合はいとうるさく
侍りしにおりしも隣の子どもそともをせきかくるに女房河原
は女房に云ひよりかゝみ一つかし給へのしとまうし
まいらせはいとやすき　借たまふなとてぬく光を彼の所なちゃう
ふよせたき蝋火かまおむ向へは板ちさ凌きみ多く
老のなみに目ばかり見あかし　歯も無くほうまてさもえふ
くけふ形さひたる翁ちたち居るに河原宵が如何

いこの家の人まくおそ汝そを問へるを我はかまへ法師と
いへる法師まくおこと我は二つ子なり兄といふ弟
とはいふ心隔ぬなかのかみなりとやたりあるにちまは
能く我おもかげに似給ひたりと打笑ふくかくおり
ますを法弟のいふるは宇羅なくかゝらひ給へのし
外に聞人は侍しおもえ心おくらくそそなしあなさまの里
も胸にはふあらまし亡き御里を侍りかくのまゝ法のまなさも
らむも家家のことさふよのまゝてはお語らなきことは恥し
きるすもかくらしきるも人ごころきるを捨ことひなく
語るまや　侍るへし　元年よわる涙ち波積るとくるとも
たくと安せ給へうしあるものしゐるうち疲れも

いとゞ更て暁近くなりぬるにや明ぬ哉浅くゝなりぬ
ねぶきまなこ燈の光もうすくなりもて翁がすがたもいつと
ちなく消してみえずなりにたりこれ時のことく
我その葉をかりみだりにかきつけて形影夜話
とは名付清書傳る事なかれ

享和二のとし霜降月

武藏と下總とさかひ二國をわかちしほとり
小詩僊堂の主し誌

形影夜話巻上

或夜影子(かげぼうし)と説話す影子問子ハ代々醫を以て業とし其學ぶ所の意如何　答曰夫醫ハ方技の一にして諸史にも其末に加へ賤しきものにさだめり然れとも良相にあらずんハ良醫たれとぞいへる人も有なれば四民救ふ乃一ツなれはさして國家の用なきものにもあらさるへし他乃技藝にては上手名人といはれなは何とするまでも皮表よりするを皮裏の事を察し其病に應ずる藥を與へて常に復せしむると難き故なきまでを
なり他の技藝は直に目に見え心にもなさんと欲せる様直すに其手を以て為し得れともなり夫を学ぶはされども為し

雖さえ牛馬ハ常にありて人〻幼より目に觸其姿をも
心に徹しあるものなれど画を学ばざる人の傍に置き
試に画き写させしむるに牛とも馬とも其状を図し出す
ことあたはず多ハ筆を下しかぬるものなるべし筆を把り
すまでも分ならず引き得るは自由なるに夫さへ然るを況や醫
事をや又其画を学ぶ人なるも才不才によりて功拙ある
ものなり已に数世画家に生れ幼よりも学びし人すらも
才あるからハ其道に切なるにあらざるまでに上手名人には至
られけるとなんさるまに昔ある人宗祇法師に連歌は如何
して上達せんと問ひしに只好きに好くべしと答へしよし
なるを諺に好きこそ物の上手なれといふもこの心にや其

好といへるを切なるを切なしさるとなるよりも遥あるといふ画
連歌を学び画を学ぶ人〻も其好く所切なるより学ぶ方品
異なりとこそ見えたり翁壮年の時連歌を学びし師の
阪昌周といへる人ハ常の談話にも其所の連歌の附合なり
此所の連歌乃附意なりさ事こ物に連歌の意を離れし事
なしけれバそこ紹巴以来の上手なりと人に称美せられ
たり又たきゝし狩野洞白の家にて探幽法印の繪本なり
とて一ツの横軸を見たり諸家より鑑定に来りし　和漢の
画人物山水四季の図草木鳥獣蟲魚の類画ハいつもなり
其生物写真までも見ハ幾度の筆にて某月某日に及ぶし
物なりきといふ何年の何月に及ぶに来りし　繪なりとぞ

眞偽を鑑定せし名印を始め其画の讃までも悉く手
法のごとく寫しとめしものなり此類數年の間數百軸を
なしたる長持八棹までに至りしとなり享保のころ沈南蘋
といへる能画の唐人渡来し時　官より我邦の諸名家の
画せるを見せ給ひしに特り探幽が繪を稱美せしよし
噂なり今も其画を見るに語るには知られども實に
目を驚かする事多し凡そ三四百年来の名人といへども
及びがたき是其力の深く其志の厚き所右寫留しものにて
も察し知るべし其兄弟の牧心齋安信も自適齋尚信も
推し雙たる上手なるを尚信は才可なりしも惜むらくは其画
風流なり安信は才劣なりしも惜むらくは其画雅ならず是其才

と不才とによりて是非なき所なるべし譬へば紗綾縮緬と
絹紬とのごとし紗綾縮緬は能き織物なれども染色あしく
しかも仕立あしき時は人おもへば見苦しかるべし絹紬は劣り
たる織物なれど品能染仕立上手なれば人おもへ見よし
ても極めて見ごとしくもなきものなり牧心齋安信を絹
紬のごとく下地なれども染に骨を折仕立を上手に心懸し
ものは探幽尚信にも劣らぬ上手と稱せらるゝなり今も識
者は其学びし所の功力に感じて目當とすべし学ぶ人
多少なり其雅と不雅とは恥るにはあらで学びし程の力にも
よるべし顕るゝは生人のあやまれるなるべし物学ぶ人を譬ば
有たきものなり醫は人命に係る病を療する業なれども格別なり

心を用ひ学ふへきハ人その才不才ハ天授にしてすへき操なし写し處に
醫者をするなと云人ありこれハ憎むへく畏るへきの甚敷なるものや
問語る所頗る是なり　猶説有や　答ていはく画家連歌師
のミならん諸技藝にても上手にて實に好る人ハ名人にも至るへし
事となんいへり翁幼年の頃若州にゐたりし時相識る人
に富岡杢右衛門といふものゐたり此人炮術家にてゐたりしか
生得の近視にて土瓶の口見分たす熱湯を茶碗に注く
ところ已か股を湯潑(やけど)せし程なり然るに鉄炮さへ取
まへたれハ十間二十間先(さき)を目當にして隣にハ小目當の上に
なり幼年にも戯れに水上に浮ひし水鳥の数を問ひし
に扇取にて類にてゐて其数を算(かぞ)へしにたかはさる程なりける又

山田半助といへる馬術家ハ年老腰ぬけて行歩も自由なら
ず已か家内も這ひありく程なりしかより君にもなけき赦
免ありて時々藩中よりも乗馬して出ありく其出る度ことに
下部(しもべ)に脊に負れ直に馬にかき乗せられ鐙に足の届くやう
ひらしくて綱かいくり如何なる若人の乗なやむかんつよの
馬をも已か心にも従ふに乗得て行むと思ふ所に快くのり廻(まわ)
し常に往き返りしたる成りけり又窪島俊哲といへる
鍼醫ハ中風して箸ハ持てとも焼豆腐をさへみ切力もなし
然れとも芒針持て人を療するにハ病前にたかはす事
なかりし又宇田川平兵衛といへる裁縫家ハ老て何寸是
なく何分と裁尺(ものさし)用ひす常に帛を裁ち切てなり老後

まゝ目のたがひ二分ほどあるべし若き時一寸と思ふ
所は二寸二分に裁ち五分と思ふ所は六分に裁つといへり是等
皆親しく交りし人どもより何れも深切に己が道ぞ
好き学べる輩にて暫時も懈怠なく脩行せし男なり
かく何事より妙手に至りたるに知らる又白石
先生は世にも知れたる博学高識の人なりしが平日意を
用ゆる事尋常ならざりしと也或時夜話に語りし
人々何事にも暇告て帰らんとせし時先生曰
各は能覚えられたるや羨しき事なりと申て語ひしに人々
口を揃へ何故左はのたまふぞ我々は記憶あしくと申せしかば
先生いや左にはあらじ何れもは胷より此些皆臆記せらるゝ

るゝ事ゆゑかくより我は記憶あしき故胷よりの些一つゝかく
頭付し置なから各読れし後は清書して得たる形ちを
申語ひたるとなり反古なとさへあるの其裏に書き留め
られしよし紳書と題せしその今に数本あるは是彼
頭付の書なりとなり又祖来先生或日其従弟なりし
高松の儒官岡井郡太夫と同しく或る兵学家へ束脩の
禮を取て入門ありしに其日彼師兵書を講せしに先字
義よりして一々説きたるに兵學者の解する字義なれば
不都合の事而已多く聴くに不堪を至て煩はしかりし
よし両人聞悩み其事ありて後打連帰る路すがら扨なふ
の講釋は退屈せり一日の欝滞散せん為め某が許に立

学ぶべしと郡太夫申せしによりて先づハ一段宜しかるべ
ししさて彼家に至り夜食調ふる其間に先生ハ今日の講
釋何にか文字をも解せしハ誤なり又何の字を何と辨ぜし
ハ差へりとて一々に辨じけるに郡太夫聞て概も能覚へ居ひ
たり我ハ退屈のあまり一ツも耳に留らざりしと申せし
よし先生聞て先ハ何故ぞ善くも悪しくも物聞に居
るしものを無益にきてなすべきすにあらずと申　居ひける
となり両家ともに許の志なるにより白石ハ白石祖来ハ
祖来と各一大家を成し居へ家なるべしかゝる大才明
達の人さへ無益にハ片時も消し居らぬ況や常人ハ猶に
此に意ゐるべきなり　ならずや

問白石祖来の二先生ハ天縦なる英才非常の人物なるに
其他なる不才の者ハ如何して其所に至るべき殊に醫は
他の道と違ひ妙所に至る事ハ尤難きことと知るべし
何ぞ本法を学んで能るべきや　答先年讃州高松
なる儒官中村彦蔵といへる人ありしが何事も心に徹する
やうに学ぶべし　と門人に教へられける是實に能事を
いふべし頭上に雷鳴ても雷と云ハされば耳に知らず
眼前に白刃をひらめきても切と云ハされば目に見へざるを
云べきなりとの人々ハ大學ニ所謂視而不見聽而不聞と
ある此所なり聰明睿智とても別義にあらず能く視し
事をも目に留め能く聴し事をも耳に留めきまゝを心に徹

し置用に臨んて行ふが聰明睿智と云ふべきなり輕く
いへば萬事氣の付人が稀しては叶はざらんか醫をなさんと思
ふ人は此所を第一として学ぶ事肝要なるべし古より
醫が業とする人此所に心付ざるにはあらざるべし古今一家を
立し人々は皆博學達才の輩にして各自見を逞うせし
も多けれども又皆其本明らかならざるが基とせし故
真理を精詳にせざるが爲に知らる夫は古来醫の宗と
する所の素難よりして始め數多の醫書中に實驗的實なるは
ものは少なければなり醫は人の醫するの業なれば先ヅ身體具
稟の内外諸物の形質を精究するを第一とせざるべからざるなれ
然るを是に疎き故に從来臟象を説くにも肝は左に位すと

いへば又傍なるは右に在りて其治を左よりに取ると説き甚し
きは飲食は先ヅ肝に受け肝より脾に傳へ脾より胃に送るなどと
無稽なる妄説が唱ふるに至るまでも一人もこれが怪しみ實に
就いて質さんとするものなく古今歸一の書なく空しく數百載
を經るしまるは何ぞや假令ば脊骨椎節のぬきも元の滑
氏は其接續は毎節下低き所なりと定む故に大椎の命究をも
ふくも在第一椎上陥中と説けり又明の張氏の説に於ては其節
上の高所にて接續はなすなりと決せりぬけることきも脊にて
そんなる故に兩家の説一寸程の違あるを皆なく人ゝ己きうら好む所を
從ひあまりを證とすまじ可もなく不可もなきは怪しむべき
ことなり是初よりいくら好む所の切なる人なきゆゑ故なるべし

真に醫を好む人ハいかてか加様にハあらさるへし人ハ用し人
なりとも心ゆくまて思ひ得されハ人を醫する事業ハ不立事と不審
すへきの第一なれハや此邦にて艮山後藤氏一見解を立て
内經を看破し右の如き迂怪の説共を駁せんとする為に
や一向に經絡ハ無用のものと覺悟せられしハ千古の卓識と
称すへし其門人香川氏これに繼き起て師業を唱へ自
己の見を加へ一家を為せり又其後に續て山脇君出給ひ是も
事を可に心付ましむや自ら觀臟して従来の舊説を改
免古書のよくて九臟の目を唱へ古今の大誤を正し給へ
家とて藏志を著し給へとも是亦確實乃所に至らハ聊
に實に就て其本を明にすへしとの端を發せられしと

いふまてなり又吉益氏かハ近時の豪傑なれとも基と
すへき醫書なき故總て傷寒論一書に精力を盡され
しことも是を錯簡の書とて的實の所少く取る所多この
らハとて己か心に徹せし方論ともを取て語る所脉な
とハ用なきものなり偏に腹候にのミを門人に教られ
しよし是已事をはさるなき出るなるへし愚老か
家世々醫を以て我　君に仕ふれハ身なきは遊まても遊
まはさる業なり殊に不好道なれとも心らハ故に幼きより
和漢乃醫書の端を窺ひそめしに生得不才にして何
書を讀てとも是非を分たす他人ハ能も解し得るすと
只我不才を恥歳月を経しまてなり　春秋甫二十二歳

此時同僚小杉玄適といへる男京師の遊学より帰り来りて彼の地にて初めて古方家といふ事を唱ふるの徒出て其中にも山脇東洋先生抔専ら此事を主張し自ら刑屍を解きて観臓し千古説所の臓象大に異なる事を知られたりと咄しき其頃松原吉益抔いへる輩相共に復古の業を興せしよし其諸論説を聞得て扨々羨しき事なり疾醫家にては已に豪傑興りて旗旗を關西に建たり我其尾に附んには口惜し幸に瘍醫の家に生れし身なれバこそ是業を以て一家を起すべしと勃然と志は立ぬれど何を目當何を力に事を謀るべきといふ事を辨へぬ徒に思慮を労するまでにてありし斯くて日月を送りけるうち不圖徂来先生の鈐録外

書といふものを見たり其中に真の戦といふものは今の軍学者流の人に教る所の如くにはゆかぬ地に嶮易あり兵に強弱ありて何れの時何れの所にても同じ様に備を立隊を勝敗を定むべく論ずるものにてはなし總て蘆原萱原にては弓の用をなさん雨降には鉄炮は用立ず殊に太平の世の如き何時にても硫黄焔硝鉛の類市町に買得らるゝものなれどいつたん諸國乱るゝ時に當りては鉛も出ず焔硝の出ぬ國もあり焔硝硫黄を出しても鉛の出ざる國もあるものなり其時は鉄炮ありても打事ならぬは常に軍理を學びおきて大将の量に従ひ勝敗を時に臨て定るものなりと記し置給ひたり是を讀て初めて發明せる事あり是實に然るべき

るすなるなし我醫も舊染を洗ひ面目を改めされハ大業は立なくのしんと悟るべかくあらずて後初て真の醫理ハ遠西阿蘭(おらんだ)にあるを知るべきなり夫醫術の本源ハ人身平素の形體内外の機會(ようす)を精細に知るを究るを以て此道の大要となすとかの國に立るはなり充て病を療するに此に精しかららずれハ決て的中の治療ハなしかさるの理あって其一二を挙て證すべし惡言に似たれども世上の醫者の病家へ招れ初に脈を診し浮沈遲數の指下に應するハ知れども其動靜をなすものハ皮下に在て何物なることを知らん血か氣かを辨へずも只脈とふものなるとこえて多くものと見ゆるなり餘りに淺猿しきことならずや又世に三

部九候或ハ臍下一寸腎間の動或四時胃氣の脈なんどゝ称するハ皆是一身同じ血の流行する脈管の應ずれども夫れを右のやうに種々名目を付て取るも取らさる事にのゝ精神を費しひたすら其事を信用し生涯何の辨もなくなく命を預る人あるなり如此輩ハ其浮になるなり沈になり遲になるなり數となるとも何の故といふ事を知らざるべしややく熱あればハ數になるといふ程に心得て診候を極め置きて見えたり内景の事に詳なるものハ其原を明らかにすることなるなり總て脈と称するものハ血の通ふ管なり其始を為すハ心の臓にて其心に連なる大管よりなり血を注ぎ出して諸部へ周流さすることを間斷なし特なり血の和不和を

察するハ脈を切して其運動或候ふより着實なるに
なし東洞翁胗脈をなすハ用なきものと教られし恐ハ
疎漏の至りといふべきなれども古来の書何をみても
的實に其事を説たるものなし故に不得已脈ハ用なき
ものと廢せられしと察せり是豪傑の一決斷といふ
べき歟強て惡むべきすぢにもあらざるべし今時の如く阿
蘭の醫理開けし我在世に語るを聞せなば嗟や喜悦の
ふべきに今ハ千古の人となられしハ遺憾の事ならずや又
世醫脈ハ一息四至なるものと定む是亦内景に暗き故なるべし
人ハ一よりて二三動に一結するも有ものなり又絶て三部
の脈應せざるも有り愚老が亡妻と同藩宮崎甚平といふ

る人ハ三部の脈なかりき北里娼家の大海老屋利十郎が父なりしものと俳優
尾上菊五郎といへる男ハ脈二三動に必ず一結ありて是等共に病に非
ず平脈如此なりし蓋脈管ハ木根の蔓延に似たり故に
某ハ右へさし何ハ左へさすといふ様に必ず定りたるものにあら
ずかゝる人ありて右のごとくなるハ猶人面同しからざるごとくなれ
し又脈管諸部に蔓延するハ其所に從つて大小横斜齊
しからざるものなれハ其結代等或なきはその人々天稟(むまれつき)
なるべく心中の筋攣急し或ハ縮張の度或失ふこと
あるハよるところ因是等皆内景に明なれは察せら
るゝことなり脈する所の腕後三部といふものも即心より
出せるもの其道路ハ臂の内廉臑より掌中迄續き在

ものなり如此搏動する脉周身に數條あれとゝも他の部
厚肉の所は其動外に見われず特に三部の所と尺澤の所
は骨太に大鼓の桴(ばち)のぬき形をなす故血管其上を越行く
を以て此所にて診すれば脉應ずるなり既に瘦人は三部
の下臂内にて其脉動皮裏に見ゆるものあり肥人は肉厚
き故其脉瘦人に比すれば多くは細し是肉裏に沈伏し
て流行する故なり如此事を知らず偏に寸關尺と立分く
診脉は舊説に迷ひ水の月を取らんとするがごとくなる無益の
事に力を費し日を送るといへるは實に舊説に眩惑し眞
の醫理を究ることを好まざるものとみえたり古より哲
匠多しといへども此所に心付さるはいぶかしきことなり

問　脉に浮沈遲數を見するは如何なる故にや　答　脉は元
来皮下を流るゝ血といふ事を知らず此浮沈遲數の變態
は思ひこゝに及ばざるなり邪熱の為に血沸涌せらるゝ
ときは太くなり或血に粘りて出来て自由に流れず又血を
注き出す原の心臓の内に支ゆるときは流行順ならず又肺
の縮張の緩急に従ひて流行に遲速を見するなり大略
如斯事にて脉状の變を察するに其原内景の理を知らず
より出る事是は其大略なり
問　近時専ら腹候といふ事を主張し是を以て病を察
し治を施す輩あり其理あるにや　答　腹候は固より
診候の一なれども人の強壮或は虚弱等を分別し病の

根結せる所を知るに便なる所あり尤精しからざるべきものなれバこそ
臟腑の所在部位連續の狀を常に審にせざれバ如何に按腹
せんとするも察せられざるの理なり是を主張する輩何を目
當とするや愚老ハ合点せざるの常に此部にハ何の臓ありて
彼の所にハ何の腑ありといふを知りて後平常の人ハ如何
此ありなきに今かく胞脹し又斯く堅硬になりたるハ如何
にと疑を設け病者に煩しき所何ぞに有しを委く聞
糺し其面體眼神口舌及肌膚の色などを候ひ望み二便乃
利不利をたゞし且病發の新舊及平常飲食の好と不好
迄も問盡し而後其病の起因したる所以を審にし從
つて脉を切し血の運動の緩急を辨し萬事精細に

参へ考へ其所由を明らめずしてたゞ其方を處し藥を
與ふるべきものなるに尤なく腹候ごとにのみを主として心
下を何の臓の部位ぞといふこともなしに胸脇苦満の狀を
見せて柴胡湯の症と定むるハ如何なる意にや實に就て
其を知るハ心下にハ肝あり胃の腑もありて大腸も横
廻す肝の痞塞腫瘍も胃の氣脹滯食も腸の風塊燥屎
も苦満ハなすべし悉く柴胡湯にて可治や已に試刀
をせし人一胴を切りて屎水をかむりしことありされハ
彼横廻して心下に位する大腸を斷すれハなり按腹家も
かゝる事聞ても疑ひを生ずる意なく安んじたることのなかる
又彼輩常に拘攣ごとと指すものありて新に生し

多きものゝやうに思ひて云ふなるべし是は腹部に定まる
阿系阿蘭名譯されば直筋と稱する大筋なり病によりて
ては唯緊急浮起はなせどもあまた常は腹力の援となるをなす
る筋にして其牽引程よきをよく腹状となすなり此筋
力緊強なるは必壮健なるものなり此真理を辨へてには何ら
さまざま已に二王の木像に腹部へ高低を刻するは即此筋にて
力士の相を見し示す為なり又左右臍傍に動氣あるに
應するを病なりと思ふ人も有り是亦定りて在所の動
血管の大幹にて其内血の流動なれば其血の亢ぬるにて病
なれど常に動はある筈のものなり腎間の動氣といふは
此大幹の岐を為して足部へ分るる所なり又虚里の動

というは心尖乃動の應ずるなりさては心の左室は血を動脈幹
に弾射するより最も強きを以て響動特に大なり心の下
尖は即ち左室の下底にして勾つて左方に向ひ膈膜に壓
され表部に出て正しく左乳下に接し當るを以てこれ
動應あるものなり此類極めて多し猶甚しきは臍の部分
に堅硬如石ものの有るは此を探りて塊物と心得たる人
何るも是は脊骨の隆起せるなり脊骨といふものは上細く下
太くして背の方へは出す腹裏へ張り出したるものにて
殊に臍部より下の方に至りて太きものなり是を接し
て塊なりと云ふは餘りに疎漏と云ふべきなり何事にも内象
に精しからざれば按腹もならざるなりと知らるる故に

斯る等の事は審にせずして漫に腹候のみを主張し
治術施さば恐らくは大なる誤を生ずべし　東洞翁
始に此虚を唱へ今は其實を失ふ人多し　假令偶中して
治し得る病者ありとも翁を信難し
問　古より所謂經絡なるものゝ説如何　　答　是阿蘭の
説に依れる動血二脉と神經と三ツの別あり良山先生
の説に經絡は舊説のぬきものなればひ一身の在所老
絲瓜の纏紐するが如くなりといへりしは卓見に似たり
されども盡く然りとも云ふべからず勿論古人如所説
十二經十四經なと定めて一身糸の巻たる如く順道
をなし循行するものにはあらず動脉は起る所有りて血

脉を受る所有り神經は出るところなく至らざる所なきの差別
あれば片紙片言にては云盡しがたし尤禁穴といふも必無なるにも
のとはいひがたし　肩井深き時は人暈倒するといふも間々ある
ることなりそれらの所は他所よりは至て痛強く徹するなれば内に耐
ゆる所甚しく卒倒せしものにて小灸芒針の類が湧泉なといふ
穴所に施すときは忽ち蘇生するがあり死活の術も其度
が得るを得ざるとに依て大に功害あれば所謂神經大絡の
在所なりしなり縦へ十四經の名狀はなきものと決せられても
も彼禁穴のなしとは云ふべからざるにはあらじ不審あるまじきなり
なり誤つて夫等の部を傷れば瘲瘛にても世にいふ破傷風
なども發すべければ其要所なる故以てなり一概に彼

先生のめぐく經絡兪究なりとハいふべきのミ爾後東洋
先生其實を究めんとして觀臟し給ふといへども內象乃
物に是ハ何彼ハ某と證として徴とすべき基なければ唯泛
洋として見分給ふ一目撃せし所を以て直ちに其物を定め
强て九臟の目に合せられしまでなり僅に一刑屍を解て
臟志を著し給ふハ如何なる意にやいぶかしきことなれども
なり先等も疎漏とやいふべき乎東都にて岡田養仙藤本
良泉の両醫官ハ六人まで觀臟し玉ひし由なれども舊習
を改めずまさに見識も立給はざりし故に一生涯
何の用をなし給はん共に惜むべし
問先醫理を知て而後治術に及ぶハ如何して可なるや

答良山秀菴東洋東洞の四先生ハ近来の人物にて陰陽
五行の妄説を看破せられしハ卓識なりといへども外に實徵を取
りて折衷すべきものゝ備らざる時に生まれし身なれば
其論説ある所臆斷を免れず疎漏なるはやむを得ざる人の
罪にあらず時未だ開けざるゆゑなるべし翁のごとき不
才のものも幸に文運開くる時節に遇ひ萬事備はれる
の化を蒙るゆゑ悉く皆實徵のある共の從事もあるべ
き事のみ多し昔讀し漢説の解しかねたるものハ自
已の愚鈍なるのみならずと今に至て暁まり漢土
乃古へハ著實に論せし書ありしかども其傳を失ひし
ものかや其中にてかし諸書に筆記したるもの哉宗と

しきりしを本源として後人繼て附會せる臆度の諸説を以て經と尊び論と稱し世々相承て後にハ數千萬巻の醫書を著作し出だる事となれり是故に先ッ飲食を肝に受肝より胃に傳ふなどいへる妄説をも唱へ出すやうに成行しなれども世々一家を立し人を恐らくハ實に自ら理會せざるの説き著せるにはあらじ是ハかくもあるべき事と思ふ程の事を實著するやうに説き為したるものとみえたり故に其説を讀誦反復しても能解し得る事ならざるなりまゝ知らる最後阿蘭陀の書に從事せしに文字ハ真に曲釘蚊脚のごとく言辭ハ實に侏離鴃舌なれども書き習ひ讀々慣ぬ其説を解するに至れハ猶蔗を噉ふに先ッ尾を食ひ

て其本に及び真の甘ミ出て佳境を得しといふごときに至れり彼邦立る所にてハ凡醫を業とするものゝ先ッ始て形體内景の平素を精究するを第一にとする事なりて夫人ゝ此身の營養を為すハ飲食を待ち其飲食消化腐熟して其精液血となり一身を宣越流通するハ常度なり若其飲食の變によりて化成する所のもの濃くも稀くも成りて或ハ辛くも酸くも變して惡液となり是よりてハ諸病を釀し成すと説り又風寒暑濕の氣に傷らるゝときハ常に腠理汗孔より發泄する蒸氣彼語にて「オイトワアッセミンク」といふものゝ皮裏に留滯して外洩する事能はず終に此物病を為すこれ則外淫諸病の因る所なりといふ事彷彿たる

知らざるゆゑに成たり是等少しは身體の理を初めに覺
悟せざるにより想も及ばざるなり如此なる故に醫を学ぶ者此
るを第一とし然して後治療の道を知るといふを曉
きなり況我瘍醫は湯液内治のみに非ず専ら外より施すの諸
術種々あるをされば常に身體中此所には何の脉何より經り
て彼所より骨の形はかくのごとくあり此部の筋は如何なるを詳にしら
ねば又金創折傷脱臼を療しかつ又腫物にも妄りに鈹
針を下さんとすといふ事を知る預め其本を明らめざれば治を
施さんとすとも人を誤る事多かるべし然ればまさに由つてまさ
に考ふるに預め形體を究るは所謂兵家が孫呉を同
じ事なるべし孫呉を知らざれば軍理は立ぬものと聞及

なり醫も形體に詳ならざれば醫理は立ざるものと知るべし
漢土の醫者悉く治療が拙きは何ぞや又其書悉く廢れたるな
きにはあらず蓋漢醫は孫呉を知らざる軍師のごとくにて
只合戰の場數になれたるを以て能戰ひ其功によるべく
次第に身を立國を興したる將のごとくなるものと同く戰闘
に能なせども軍理に疎きゆゑ勝事ありても毎に危き
ことなきに似たれどもまことに今軍をせんには度々
の戰場を經自然と軍の汐合を覺え物師の物語を能
聞戰に臨て是を用ゆる人は大功を得るごとく醫も漢醫
等數人を療し自然と覺し療治の機會を書著せし
書等を讀て醫理に從ひ撰ひ用ひは今治療の際に必功を期

すへきるすなりけれとも元來軍理ニ疎き大將ハ必勝の理を他人ニ說事ハあらさるへし殊ニ軍ニも平場ニて戰ひ得たるあれハ嶮岨の戰ニは拙く嶮岨ニて戰ニも得たるもまとの平場の戰ニハ不得手たるかことく漢醫ニも溫補に偏するありも攻劇に偏するあり是兩なからを兼たる人ハ少し是本ト醫理ニ疎きかなるへし又藥方ハ所謂兵器の如し弓鉄炮鎗長刀と其器ハ別なりといへとも用るニ臨んてハ各用あるものなり藥も其如く阿蘭の醫法を取るもの阿蘭の藥ニかきるときは療治を成かたしといふにハあらす何れにても醫理の詳なる法ニ從ひ馴る所の汗吐下和の法ニ從ひ寒涼溫熱の利あるものを辨へ藥を與

る時ハ大敗ハなかるへし凡戰を善くするものハ軍ニ臨て兵器を士卒ニ授け是を用ひて戰ふるなり其器ニは守るニ利あるもの有又攻るニ利ある物あり又一時ニ破るに利あるものあり其兵の強弱を考へ器の利鈍を辨へ其場ニ利あるものを撰用ひ備を正し隊伍をとゝのへ早く敵を平くるを要とすこれを眞ニ大將の任といふへきなり醫も其如く方ニ漢土阿蘭ニて差別なく下す藥ハ下るものなり吐す藥ハ吐ものなり其病ニ應して何ニても功の速なるへき藥を撰用ゆへし其の指麾醫者の任なり前ニ云し來翁なと說の如く弓ニて用ゆる所あり鉄炮の用ゆる所あり又玉藥ニて出來ぬ時も有るへ只其時ニ臨て軍理を以て宜ニ應

し戰ふ事肝要なるべし醫も醫理を以て何事なりとも
便利よき藥方を用ひ條理に差はず病を治すべきなり是
和漢阿蘭ともに弓は引て矢を發つものなり鉄炮は火藥(クスリ)
を用て鉛丸(タマ)を打出すものなり形は異なれども用をなす所
は同じ事なり藥も亦然り一味の上にて云ふて大黄は下を
なすものなり麻黄は汗を發するものなり阿蘭にても同じ事なり
然れども漢土の醫流は大黄を用ゆれば其藥氣は直に押
し下す事に思ひ麻黄を用ゆれば麻黄は汗となりて出る
やうに思ひて病者に與ふる様に見えたり是只何となく
覚し彼塲數の功と同意なり阿蘭人の用る意は左にあら
ず大黄は性を苦酷にして腸胃中裏面ある神經

を侵襲刺棘ハ神經是を厭ひ悪ミ自ら攣急し其所の
キリートルより水液を搾出しきたるをもつて蕩滌驅
逐するなり故に下利の功を奏する事なり假令ハ眼中
に細微の塵芥砂末の類入る時ハ眼胞裏面の神經是を厭
ひ其部に有る所のキリールより水液を出し涙と為
して流し去るがごとし其悪む所の物なき時ハ蕩滌するに
るなり且專ら膽を扶る藥なり膽汁の性常を變し
たるを調和して復し治するの功あり膽汁は元と
飲食を消化し其化物を運施するの官なり若此汁調和
せずして腸中に注くの常を失する時ハ飲食尅化すること
を得ず化物も運施の道を失す故に諸部凝滯の病を生

また此物を與へて其汁を調和し宜きを得せしむるときハ其本性を遅らするよつて停滞ある物化することを以て蕩滌瀉下の功をなさしむるなり又麻黄ハ性氣輕浮慓悍にして能壅塞或透發開達するの功あるを人若し寒冷の外氣に冒觸されハ皮中の神經攣縮して汗孔壅塞し表發の蒸氣内欝せらるに於て神經攣縮されハ惡寒を生し蒸氣内欝さるれハ發熱をなすなりこれを治するには麻黄の性氣を以て神經を開達し其攣縮舒暢して汗孔自開き動脉の末抄も疎通す依之血液散渙して蒸氣よく昇散し皮膚に蒸溜して汗となりて出るなり是等の事をよく辨へきを唯見けもなく汗下の能あるものと而已心得るなるべし藥性を窮るものハかゝる速ハ何まで功をなすものハ用ゆるなり但彼醫理

を学べきかゝる利あることを知らずて藥を與ふ其理或辨へずして藥を投ずれハ何といふ意もなく功をなすあらぬ事也況んや今日治療或なすに漢醫熟煉して自然にさとる汝合せて用ひ来りし方或揀取りて我合點せし醫理に参へ考へ病に對して斟酌し可下症ハ下し可汗病ハ汗して可なるべし偶西洋醫説を主張せる人も其闕品多きに苦し又阿蘭異方を用ゆるにも其不足なることハなかるべし此等の事を能く辨へ我業にさへ深切ならんにハ自然と療治の功者にハ至るべき事なり

問　然らバ醫理に詳ならざれバ療治ハならぬべき乎　答　否假令醫理を詳に究むるとも療治ハならぬものなり醫理ハ知りても療治のならぬと思ふハ大いなる謬りなり所謂書或

以て馬を御するの喩へ趙括か父の書をよくして却て大敗を取
るが類有べし自身にも手を下し幾度も戦ひ場數を經さま
そ勝軍をも見ぬと同事にて病人を數多取扱ひたらねば其
上にて猶骨を折療治し尤和漢の差別なく先哲の
著し置る書共を讀みかくはある時は下しかゝる時には吐して
効を得しといふ意を心に留め患者に對しては用事數
多なる内には自然と醫理符合し心に徹する所出来るも
のなり假令是迄自ら療治せざる病にても醫書を多く
讀み能意を得るときは其説ある所の塩梅心に徹底し初の
ほどより發明あるものなりかく心懸なば自然と
我業を上達する筈なり醫理を志すものは切なるにはなしとぞ

只阿蘭の書をのみ讀みて事足りぬと思ふは誤りなりたとへば
祖師が録をのみ讀みて經を知らざる禪僧のごとく傲慢に
のみなり實用には立ざるものと思ふべし翁が壯年の時初
て阿蘭書を讀み稍其意を解したる頃漢土の外科書を
讀に金瘡の取扱なども何の書をみても疎し外々の方論
も何が用にも立事なしと廢置し漢土なるも古今瘍醫は
なきものと思ひ我業に自負の心も出たりけるが其後少
年輩と外科正宗を會讀せしに實驗着實なることも多し
其中疔瘡などは初め萬靈丹にて發汗し又砭石を以て
惡血を去ることあり是等の所を考合するに阿蘭にても諸
瘡瘍多くは發汗劑を與へ鬱毒を折き或刺絡して亢る

血を瀉すると説る品もなかるを治療の理は一ツなるを知る迄
を以て見れバ先きに自負せしは若氣の誤りなりと恥し
く思ひしなり但おもふひしが如く漢土の醫も身體の理に
疎漏なる故毎事着實なる所すくなし古今に勝れしといふ
傷寒論も身體の吟味は正しからざるを見え假りに六經の
目を立て傳經越經等の説を設る事有ると思へば無理なる
論のミ多し其上元来錯簡の書にて王叔和らが補ひし
ものなれバそれを質んとてく條辨より初め明清に至
る諸名哲の書論多く施て我邦に及ても古今の數輩頭
を取て尾に繼き尾を取て頭に續事色々に説き爲せども
何れが是何れが非今に至て一定せん翁の文盲故其辨論

の不解を知らざるよりおこりて定まりたるといふも知らざるを又かく
片押なるものをいふは我性偏僻なるを知らねど仲景再生し
此章は彼所なりと彼句は此所なりといふて格別な事あら
ざるに於ては翁は全書とも思ぬなり但其書中所説其論
其方間く的實なる有て實に無類正銘の正宗名作
ともいふべきものあるて是より外に善なるものはなし さりな
がらも何をいふも段々にわれたる名劒の如くなるものも用ひ
やうあしき時は切先にて切べき所を鐔本にて切るといふが如くなる
誤りもあるまじきものにもあらん況此一書を以て萬病
を治すると思ふ人あるは猶更危しかるべきなり其他後
世の書に至りては専ら五行配當を主張して論説を設

しものあるハ捨る所多くして取る所少し しかれども其取
捨する所ハ多く病人を取扱たる人にあらざれバ知りがたきこ
のなり阿蘭醫説といへども亦しかりと彼醫も已が好む所に
執泥する所なきにしもあらざるなれバ其本とする所
正しきなる取所多くして捨る所ハ少し 但此等の取捨は
其讀者の力によるべし 翁が壯年の頃長州醫官栗山幸庵
及其藩醫等と同じく會話せし日に幸庵同僚なりし
小倉宗爾といへる醫を指て曰此宗爾ハ良き醫者なり
本艸綱目の附方中にて已が用んと思ふ方百方近く抜萃
せしと語られし 彼數千の方中より左斗りを書抜せしハ
實に具眼の醫といふべし 凡庸にてハなしえぬ所なり何事にも

醫ハ多く書を讀ミ療功を積ての後ならでハ名手にハ至らざ
ぬことゝ思ハるゝなり書斗讀ても功者にハなられず療治ばかり
しても博く学ハざれバ未だ逢ざる病症に對してハ當惑するものな
り博く醫書を讀其要所を心に徹底し置たる人ハ機に
臨ミ變に應して的方を處し良功を取るものなり書物斗
讀ても病者を多く取扱ハざれバ療治のならぬといふべし
譬ハ白羽の白と白雪の白の如し白きといふハ同事なれども雙へ
みる時ハ其違ひ格別なり是を辨へるやうに書き分るなれバ
司馬遷紫式部が筆力といへども及びがたし往時鶴屋德兵衛
といへる玉人あり是ハ其筋にての老商なりしが水精の眼
鏡と諳厄利亜製の硝子眼鏡とを見分るを傍観せしに

黒白の物を揀み分るよりも容易なるべきに翁これが見て甚感せしは何なりしか今は忘れたり是何となく場數の功なり此所に至るは書をよみてハ功者にはなられぬ也人が療治するうちにハ自然と功者に至るの場合なり然れども此自然の妙處に至りてハ父子といへども傳ふ事ならざれバ已れも此所なりと心に識るのみ能なれバ彼合戰場數が經たる物師の自得したる汐合と同じ事なるに爲し掬水精と硝子とが分別をするを試るにこれが舐るに水精ハ冷く硝子ハ温なり是實に天然と煆煉との別なりおのづからいへるごとく此所ら軍理とも醫理ともいへる所なり醫理なりに骨が折る人ハ所謂書物好といふものなり療治をあやまりて

骨が折るゝ人ハ療治好といふものにして實の醫者好といふものにはあらじ醫が善くせんと思ふものハ両ながら廢すたるゝものなりと知るべし

形影夜話卷上終